
有坂秀世著 『国語音韻史の研究』
(増補新版)』

有坂博士の論文集で、また『中国語音韻史の研究』でもある。はじめ昭和19年に明世堂から出版され、昭和32年に増補新版が三省堂より出た。中国語学に志す者の必読書。

博士の研究の中心は、古代日本語における音節結合の法則にあり、その原型はすでに旧制高校時代につづったノート（『語勢沿革研究』、三省堂、昭和39年。）にうかがえる。一方、中国語音韻史の研究も重要な研究課題であり、特に該書所収の論文「カールグレン氏の拗音説を評す」（もと『音声学協会会報』所載）は、中古中国語の重紐問題をはじめて解明したものとして、歴史的に重要な位置を占め、その後の日本における中国語音韻史研究の方向に大きく影響した。石塚龍磨の『假字遣奥山路』（寛政十年稻掛大平序）にはじまり、橋本進吉博士による再発見、一連の新研究を経て確立された、いわゆる上代特殊仮名づかい研究の伝統がその根底に活かされている、といてよいであろう。

有坂博士は、大学を卒業して大学院に進むや、胸をわずらって闘病生活に入った。初期の諸論文は、博士の生けるしるしとして病床から発表されている。中国語音韻史に関する論文の多くは、退院後から病氣再発までの五、六年間に書かれた入魂の作である。爾後闘病に専念すること十年、該書が学士院賞受賞の榮に輝いた昭和27年3月、妻子なく、母堂にみとられつつ世を去った。博士の壮絶な一生は、珠玉の名篇と教訓とによって不滅である。

[1957.10, 三省堂]